

2016年1月25日発行

地域と協同の 137号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ ー新しい年を迎えて

持続可能な地域社会の未来を 若者ととともに

地域と協同の研究センター専務理事
生活協同組合コープあいち参与
向井 忍



1月23日第12回東海交流フォーラムの感想発表の様子

来年の卒業生の就活シーズン。今年は一転して企業説明会が早まり、学生は「企業研究」の時間がないまま志望を絞ることになると言われます。そうした中、大学生が協同組合に接する機会をつくる取り組みが動き出しています。

1月23日に開かれた「第12回東海交流フォーラム」もその一つ。参加者102名で「小さなつながりからひらける地域の未来」をテーマに5つの事例報告を受けて話し合いましたが、その中に大学3・4年生が8名も。これはコープあいち・南医療生協・大学生協東海事業連合でつくる「社団法人協働・夢プロジェクト」が、大学生向けに協同組合を知る「協同体験セミナー」を企画し、その一環でフォーラムを案内したことによるもの。この日は5名が感想を発表し「私を受け入れ、話を聴いてくれる場でした」「人と地域をつなぐのが生協」「来年は人のつながりが難しい都市部の事例を知りたい」とそれぞれの言葉で語られたのが印象的でした。

3月10日に大学生協東海事業連合が主催する合同会社説明会でも、地域・医療・大学生協と社会福祉法人の合同ブースが設けられ、来場する学生向けセミナー「COOP（生協）・NPOで働くとは？」が開催されます。昨年は100名以上が参加したセミナー、今年は若手職員の言葉で構成する予定ですが、名大生協2年目の高橋君、コープあいち1年目の鈴木さんも登壇予定。二人はこれまでに会ったボランティアや生協職員の姿が、今の自分に影響を与えたといいます。こうご期待！

4月には名古屋市立大学で、地域と研究センターによる寄付講義「現代社会と人と地域のつながり」を開講します。主に1・2年生が受講しますが昨年は登録100名を超えました。15回のうち13回の講義を生協やJA、NPO法人、社会福祉法人、ボランティアが受け持ち、受講生からは自分の進路と重ねての感想も出されています。

地域と協同の研究センターの役割の一つは、協同組合を好きになる人を増やし継承すること。紹介事例はその大切な一部です。持続可能な社会に向かっての協同の輪を、若い力とともに広げていける年にしていきましょう。

CONTENTS

巻頭エッセイ	
持続可能な地域社会の未来を若者ととともに	1
「ものづくりの思いを語る会」からのメッセージ	
くらしをつくっているみなさんのお声もぜひお寄せ下さい	2
『未来を拓く協同の社会システム』	
日本協同組合学会賞受賞!のお知らせ	3
会員活動 農業・農協問題研究会東海支部例会	
～規制緩和と食の安全について考える～	4
情報クリップ	5～7
企画案内・書籍案内	8

研究センター 1月の活動

6日(水) 事務局会議
8日(金) 組合員理事ゼミナール
9日(土) 第6期マイスターコース実践交流会
10日(日) 生協の(未来の)あり方研究会
14日(木) 三河地域懇談会実行委員会
16日(土) 共同購入マイスターコース第6回
20日(水) 常任理事会
21日(木) 研究フォーラム職員の仕事を考える
23日(土) 第12回東海交流フォーラム
25日(月) くらしを語り合う会
29日(金) 協同の未来塾第5回

「ものづくりの思いを語る会」からのメッセージ 文責：伊藤小友美

くらしをつくっているみなさんのお声もぜひお寄せください。

「ものづくりの思いを語る会」は、地域と協同の研究センターの会員で、ものづくりをしている方（その多くは生協のお取引先）と、関心を持つ方（その多くは生協関係者）で交流、懇談している会です。第1回目は、2002年4月に開催されました。ものづくりの思いを語り合い、メーカーとしてそれぞれの現状や意見の交流が行われました。以来、会を重ね、2015年12月には第29回目の会を開催しています。

合資会社野田味噌商店や内堀醸造株式会社、九鬼産業株式会社等メンバーの生産の現場にもおじゃまして、工場の様子を見せていただき、学習・交流も行っています。



【 米たまごの田んぼ 常滑市 】

2015年の7月には、新しく会員になっていただいた市田真新さんの有限会社デイリーファーム（常滑市）へ伺いました。「あいちの米たまご」をご存知ですか。愛知の農業、農地を守りたいとの思いから始まった取り組みで、地元産の飼料用米を10%使用した飼料で育てた鶏の卵です。「あいちの米たまご（10個）」を1年間毎週1パックご利用いただくと、愛知県内の田んぼ4坪で、お米を栽培することができます。利用を通じ、この取り組みを応援してください。」と市田さんはいつもおっしゃっています。

デイリーファームが運営する「とれたてたまごの店【ココテラス】」が、2015年6月5日に常滑市にオープンしました。農場を見せていただいた後、「ココテラス」で、デイリーファームのたまごをたっぷり使った手作りのお菓子を味わいながら、市田さんの卵にかける熱い思いをお聞きました。

「80年、この地域で農業をやってきました。地域には感謝したい。大事な食べ物をつくっていると訴えたい。農業を照らしたい。健康にいいものを照らしたい。あなたの健康を照らしたいという思いで、『ココテラス』と名付けました。プリン、シュークリームをつくって、たまごのよさも発信していきたいと思っています。高くても、ノンGMOの飼料を使っています。みなさんのためになると信じています。頑固に使い続けて、ノンGMOの灯を生協組合員、地域の人と灯していきたいと思います。」



『ココテラス』の近くの飼料用米の田んぼは、海の見える丘にあります。さわやかに吹く海風に頬をなでられながら、緑豊かな日本の原風景を目に焼き付けることができました。愛知の農地、日本の農地を守りたいという市田さんの何代にもわたる崇高な思いに触れ、一同、感動も新たに帰路につきました。

この「ものづくりの思いを語る会」のテーマは、お互いにあたためてきたものづくりについて、その思いを確認しながら、次世代につなげたいというものです。消費者のパートナー、生産者・メーカーの方々が自由に勉強しているグループという位置付けになっています。

年に2回くらいのペースで開催していますが、「語るだけで意味があるのか、いや語ることに意味がある」「知り合うこと、消費者と考えることも大事」などの意見のやりとりも重ね、今後どうするかについていつも議論しています。

2015年12月の、第29回「ものづくりの思いを語る会」では、以下のような意見が出され、濃密なやりとりがありました。

- ・コープ商品の歴史を知らない人が増えている。商品史、商品物語を残すことができないか。
- ・生協の職員、特に若い人に、現場へ来てもらい、肌で、空気、匂いを感じてほしい。
- ・流通からの動きに変化がある。価格だけでなく興味、特徴あるものが地元で望まれている。
- ・半世紀付き合いのあるメーカー、生産者は財産。
- ・テクニックではなく、思いを伝えることで可能性が広がる。

引き続き議論を重ねて、何らかの形にしたいと考えています。日々、くらしをつくっているみなさんのお声もぜひお聞きたいと思えます。

『未来を拓く協同の社会システム』 日本協同組合学会賞受賞！

生協の（未来のあり方）研究会が2013年10月に発刊した『未来を拓く協同の社会システム』（日本経済評論社）が、このたび日本協同組合学会賞を受賞しました。会員のみなさんに謹んでお知らせ致します。



日本協同組合学会学術賞（共同研究）の受賞にあたって 岐阜大学応用生物科学部 教授 荒井聡

2015年10月に岐阜大学で開催された第35回日本協同組合学会大会において、『未来を拓く協同の社会システム』（小木曾洋司・向井清史・兼子厚之編著、日本経済評論社、2013年刊、vi、300頁）が学術賞（共同研究：代表 小木曾氏）を受賞されました。ここに謹んで御祝い申し上げます。

地域と協同の研究センターは、2009年5月に東海3県の研究者・実践者12名からなる「生協の（未来の）あり方研究会」を設置し、これからの時代の協同組合のあり方について30数回の研究会を重ねてきました。これらに加え、多くの現地研究会などの成果をも取り入れて本書が刊行されました。同研究会に参画した11名（研究者5名、実践者6名）の執筆による集団的労作です。

本書は「何故1990年代後半以降購買生協の停滞はもたらされたのか」という「自問の中から生まれた」ものであるとしています。東海地域の地域社会、消費者、食と農、福祉といった多面的な協同の取り組みの現状分析をふまえ、近い将来に生協運動が分岐点を迎えることを予告し、新しい時代に向き合う新たな「価値の創造」が今後の事業・運動に求められていることを明確に説いています。そして、事業・運動への組合員参画を基調とし、組合員のライフステージごとに、その生活に寄り添う新たな21世紀型の生協像として、「生活協同組合：東海モデル」を抽出しています。ここにおいて、事業面での営利企業との同質化傾向という生協の課題を乗り越えるべく、公益という普遍的な視点にあらためて注視し、協同組合の相対化を試みています。これは学術的にも重要な試みで、その点が高く評価されたのではないかと思考します。

このように本書は、東海地域における生活協同組合の事業と運動の成果の結晶体というべき貴重なものです。同時に、生活協同組合「東海モデル」の取り組みは、まだ理念型に留まるところも少なくなく、さらなる実証的・理論的な深化が求められています。この受賞を契機として、生協陣営においていっそう連携が深まり、新たな価値創造に向けた取り組みがさらに広がることを期待したいと思います。その意味でも、広く一読をお薦めします。

日本協同組合学会学術賞（共同研究）を受賞して 執筆者を代表して 小木曾洋司

本書をご推薦していただいた荒井先生のご紹介にありますように、昨年10月に開催された協同組合学会で学術賞をいただきました。新設の「共同研究」という領域での受賞です。発行から時間が経っていましたので、学術賞選考委員長の北川太一先生から受賞の連絡をいただいたとき、本当に驚きました。「生協の（未来の）あり方研究会」で、これまで生協の運動と事業を発展させることに尽力されてきた、また今も尽力されている多くの「生協人」とも言える方たちのお話をお聞きし、議論してきました。この議論から生まれた本書が学術的にも実践的にも問題提起足り得るものになったとすれば、執筆者全員にとって大変光栄なことだと思います。

本書で問われていることは要するに「生協って一体なんだ」ということです。この問いは、経済のグローバル化と少子高齢化という大きな社会変動によって生協の存在意義が改めて問われていることを意味します。したがって、生協という運動や事業の特徴、たとえば、組合員とは何かといった根本的な問いが真正面から議論されることとなります。組合員は出資・利用・運営の三位一体を担う存在とされていますが、これだけ大規模組織になった生協でそれがどのような形で現実に可能なのか、地域への貢献とは？コープ商品とは？等、生協を表現するキーワードが改めて議論の遡上にあがったように思うのです。それは現状の問題を構造的に理解するためだけではなく、生協の新たなチャレンジの基盤と方法を考えるためです。

2012年は国際協同組合年でした。国連によるこの国際年の決定理由に「協同組合は、その様々な形態において、女性、若者、高齢者、障害者および先住民族を含むあらゆる人々の経済社会開発への最大限の参加を促し、経済社会開発の主たる要素となりつつあり、貧困の根絶に寄与するものであることを認識し、……」（2009年の国連総会宣言 JJC 訳より）とあります。このような考え方を基礎に、生協の新たな社会的役割をテーマにする私たちの研究会は、格差と競争の社会が進展する今、助け合いと分かち合いの社会を築く具体的な方法論として生協論を、研究者、職員の議論を通じてさらに積み上げていきたいと思っています。

会員活動 農業・農協問題研究会東海支部例会 より ～規制緩和と食の安全について考える～

1月28日、岐阜県岐阜市岐阜大学サテライトで農農研東海支部設立15周年記念の研究例会がコープぎふの後援を得て開かれ、多くの研究センター会員も参加して行われました。その概要のまとめをいただきましたのでご紹介します。（農農研静岡県会員 岡田厚生氏のまとめをもとに事務局が編集）

□報告1□ TPP大筋合意の課題・問題点を中心に

岐阜大学教授 荒井 聡氏

1 TPP大筋合意と食の安全・安定供給―問題点を探る

(1) TPP「大筋合意」（2015-10.5米国アトランタ）

◆内容① 関税撤廃率 全品目95.1%、農林水産物81.0（即時撤廃51.3）%、うち重要5品目29.7%、② 重要5品目の主な合意内容米：特別輸入枠新設 麦：マークアップ率45%削減、特別輸入枠新設 牛肉：関税38.5% 16年目に9%に 豚肉：低価格帯の従量税 10年目に10分の1に 乳製品：脱脂粉乳・バターに低関税輸入枠新設

◆問題点① 日本農業のバーゲンセール、「聖域」大幅開放 ② 国会決議との不整合性 ③ 関税撤廃に伴う関税収入の喪失

(2) TPP大筋合意の影響試算をめぐって、農水省と鈴木東大教授による試算があるが、前者は低く見積もり、後者は約1兆円超生産額減少とする。

(3) TPP大筋合意と食の安全

- ① SPS（衛生植物検疫措置）はWTOの同協定と同じ
 - ② 科学的でない理由で輸入を認めない場合、専門家間で協議できる仕組みを新設
 - ③ 「貿易上の課題」を話し合う日米並行協議を設置
- ・日本の食品安全規制はもはやこれ以上緩められないところまできていて、さらに他国に日本の安全基準に干渉する隙が生じた

2 規制緩和と食の安全リスクを考える

- (1) 食品添加物―既成事実化の代表―承認の簡素化
日本は2015年9月末449、さらに増える見込みで事実上、野放し
- (2) 遺伝子組換え作物・食品-GM作物表示廃止、日本の安全確認作業提訴の懸念
- (3) 地産地消表示-米国は日本の地産地消奨励策も参入障壁とする
- (4) 牛肉・乳製品-人工ホルモン・成長剤、BSE、O157、硝酸態窒素等の問題山積み
- (5) 検疫制度の緩和-輸入食品、残留農薬の検査の簡素化

3 放射能汚染と食の安全

- (1) 福島県農産物の今―水田は表層土と深層土の入れ替え、カリウム肥料施肥、果樹は枝伐採、粗皮剥離、高压洗浄の結果、米は全量全袋検査で25Bq/kgの測定限界未達が99.98%、果樹・野菜は測定限界未達がほとんど。EUの専門家委員会が福島県の野菜、果樹、畜産物の放射能検査の解除の方針

- (2) 複雑化・深刻化する原発事故被害―食の安全リスクは原発再稼働リスクと似ていて、政府のいうことをそのまま信用できない。

- (3) 復興の取り組み・視点から学ぶ―被災地の復旧・復興も基本はコミュニティの再生。

4 まとめ

安全な食料は日本の大地からの方針で今後、日米並行協議での規制緩和を注視して、適切な対応・対抗していくことが必要。

□報告2□ 安全に配慮した農業生産

れんげ米はつしも生産者 川合 洋三氏

「はつしも」は昭和25年にできた岐阜県の銘柄米である。西濃地方では良質米ということから、60年近く栽培されて

きた。10年程前から食の安全ということがいわれてきて、農協の指導に従って栽培してきた。それは化学肥料半減、減農薬（除草剤1回、その他1回）の栽培方法である。だが、

この栽培方法だと生産者には、減肥・減農薬による収量低下と除草剤の使用が限定されることによる手作業の除草が増え、労力が多くなる。そして生産費が掛かる不利益が生ずる。消費者の購買価格の面での協力が無いと栽培面積は拡大しない。また、行政は規模拡大というが、安全、安心な米の生産をするには生産者にそのことに対する拘りの気持ちがないとできない。これからも安全、安心な米の生産をできるだけやるつもりであるので、協力して欲しい。

◇コメント1◇

コープぎふ副理事長 上林美也子氏

西濃地域の生協では、はつしも生産者との交流を行っている。高山市ではりんご生産者（もだに農林グループ）との交流を10年来してきた。生協は食品の安全、安心を心掛けてきて一つの形として食品安全基本法が実現した。

コープぎふは現在22万所帯で、3戸に1戸の加入割合であるが、安全、安心な食品というより安価なものを選ばざるを得ない所帯が多くなってきた。規制緩和で安くなるのが良いという人もいる。だがそれは店に出ているものが安全、安心であるということが前提である。その面では諸々の規制緩和に不安が残る。

消費者として安全、安心な食品を得るためにはいろいろな情報を得る必要があるため、そのためにも学習会や生産者との交流会を続けていきたい。

◇コメント2◇

愛知学院大学講師 関根 佳恵氏

- (1) 食品の安全性については安全な栽培が日本全体に広がっていない。例えば神経に作用する農薬の使用量は韓国に次いで世界2位である。農薬、遺伝子組み換え作物についてはEUの予防原則が参考になる。

- (2) 規制緩和については具体的に誰が要求しているのかを見る必要がある。

- (3) 貿易自由化と飢餓の撲滅と言われてきたが貿易自由化と食料安全保障とは両立しないことを国連も認めた。これからの方向を根本的に考えなおす必要がある。

- (4) 望ましい農業のあり方としては経営形態として環境費用も考えた家族経営のような小経営も考えるべきではないか。

◆活発な関連質疑及び意見交換の後、荒井氏から、規制緩和の「規制」とは、我々が生活を守るために作ってきたルールと考えるべき。TPPは食糧問題に限らず生活全般に係る問題であり、食料は農業者だけの問題でなく、消費者の問題である、などのまとめがあった。



情報クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価/ページ
<p>▶伝えたい・聴きたい、 新しいCOOP商品</p> <hr/> <p>NAVI 2016. 1 766</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 伝えたい・聴きたい新しいCOOP商品 声に応えた商品づくりを続けています</p> <p><コープのある風景> 京都生協 <2016年新年メッセージ> <こんにちは！生協女子ですっ！>コープあおもり 黒石店 鎌田恵さん <元気な店舗の運営を学ぶ> コープこうべ・コープ苦楽園 <宅配・現場レポート> 生協コープかごしま <生協大好きママコプ山さんの 教えて！CO・OP商品> CO・OP応援食クッキー <商品の産地より> JFみやぎ志津川支所 <想いをかたちにコープ商品> CO-OPコアノロール <CO・OPニュースフラッシュ> コープおきなわ コープぎふ <つながるCOOPアクション情報> コープ九州事業連合 <明日のくらしささえあうCO・OP共済> コープあいち <生協職員のための接遇・対応の基本> 第10回 コープの好きな人を増やす【「気づきメモ」の取り組み①】 <この人に聴きたい> 女優 高橋ひかるさん <コミュニケーション広場></p>	<p>2016年 1月 A4版 35頁 定価 350～円</p>
<p>▶子ども食堂を作ろう！</p> <hr/> <p>社会運動 2016. 1 421</p> <p>市民セクター政策機構</p>	<p>特集 ① ストップ 戦争への道 政権交代で安保法廃止へ フリージャーナリスト 横田 一 市民の力で右傾化を止める 法政大学教授 杉田敦 元参議院議員 大河原雅子</p> <p>特集 ② 貧困の中の子どもたち 子どもの貧困 その構造 千葉明德短期大学教授 山野良一 子どもの貧困に背を向けない 漫画家 さいきまこ 大阪母子変死事件をくり返さないために ルポライター 眞弓準</p> <p>特集 ③ 子ども食堂を作ろう！ 地域を変える 子どもが変わる 未来が変わる！ NPO法人 豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 理事長 栗林千絵子 楽しいからみんなが集まる 要町あさやけ子ども食堂 店主 山田和夫 ふろしキッチン 子ども食堂 練馬たすけあいワーカーズふろしき CAPOタごはん会 大阪子どもの貧困アクショングループ キートスの子ども食堂 青少年の居場所Kitos さんさんこども食堂 さんさんこども食堂実行委員会 ナナ食堂 スペースナナ 子ども食堂を始める「10のヒント」 市民セクター政策機構 専務理事 白井和宏 各地に広がる子ども食堂</p> <p>生活困窮者支援のネットワークをつなげる 編集部 全米に広がった遺伝子組み換え食品表示運動の行方 市民セクター政策機構 専務理事 白井和宏</p> <p>未来への種まき 国連総会が「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択 國學院大學教授 古沢宏佑 おしどりマコの知たがりの日々 第1回 レッツ想定外！ 芸人・記者 おしどりマコ</p>	<p>2016年 1月 B5版 181頁 定価1000円</p>

<p>▶創造的自己改革への挑戦」元年</p> <hr/> <p>月刊 J A 2016. 1 731</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>新春対談 耕そう、大地と地域のみらい。戸田恵子 × 奥野長衛 特集 「創造的自己改革への挑戦」元年 第27回JA全国大会決議の実践に当たって 橋本大二郎（テレビ朝日『ワイドスクランブル』メインキャスター元高知県知事） 農業担い手への経営者教育の意義と農業協同組合 ー全員就農を果たした日本農業経営大学校の第一期卒業生 堀口健治（日本農業経営大学校校長） 若い力が「ひと・生き方・ちいき」を未来へ繋ぐ 佐藤可奈子（かなやんファーム代表）</p> <p>・地方紙ニュース 第58回 輸出拡大に向けどう生かすミラノ万博出店 秋葉宏介（山形新聞社）</p> <p>オピニオンリーダーに聞く 木下寛之 ・きずな春秋 ー協同のこころー 童門冬二 ・協同組合の広場 日本生協連 JF全漁連 全森連 生活クラブ連合会 ・展望 JAの進むべき道 農業協同組合の存続をかけた5年間で全力で 加賀尚彦(JA 全中常務理事) ・海外だより 連載 56 [D.C 通信] アメリカ中西部の穀物生産と日本への輸出 中村岳史</p> <p>次代へつなぐ協同実践塾 ・人材育成について考える(3)（最終回） 人材育成の具体策の「ヒント」(人材育成担当者向け)</p> <p style="text-align: right;">JA 全中営農指導部</p>	<p>2016年 1月 A4版 48頁 年間購読料 4,800円 (送料別)</p>
<p>▶ヒトを知る ー脳科学が映す人間の姿</p> <hr/> <p>生活協同組合研究 2016. 1 480</p> <p>(財) 生協総合研究所</p>	<p>■ 巻頭言 一人ひとりの組合員の声を大切に</p> <p>▶特集 ヒトを知る ー脳科学が映す人間の姿 人の行動を科学的に解明すること ニューロマーケティング ー 選択の認知脳科学 人の行動を決める古い脳と新しい脳 風評被害の心理学 行動経済学、その歴史と展開 ヒトの協力の謎を巡って</p> <p>■ 時々再録 ビッグデータ時代の栄養学</p> <p>■ 本誌特集を読んで（2015・11）</p> <p>■ 新刊紹介 川原理子著『戦争と検閲 石川達三を読み直す』 大沢志佳子 神野直彦著『「人間国家」への改革 参加保障型の福祉社会をつくる』 山崎由希子</p> <p style="text-align: right;">小方 泰 佐倉 統 植田一博 鮫島和行 平石 界・池田功毅 大飼佳吾 三船恒裕 白水忠隆 伊藤剛寛・並木静香</p>	<p>2016年 1月 72頁 B5版</p>
<p>▶TPP「大筋合意」から 見えてくるもの TPP=安保論</p> <hr/> <p>文化連情報 2016. 1 454</p> <p>日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>新年のご挨拶 自らの果たすべき役割を果たすべき何たるかを問いながら 神尾 透 新年のご挨拶 協同組合の真価を発揮し、希望の持てる一年に 山田尚之 新年のご挨拶 役員一同 第8回「来てみんない感謝祭」を開催しました 安本圭亮 2016 新春座談会 農協・厚生病院として地域をどのように作っていくのか 金子勝・梅田譲・早川富博・山田尚之</p> <p>二木学長の医療時評（134） 財政審「建議」の医療・社会保障費抑制要求としてKPIの危険性 二木 立</p> <p>TPP「大筋合意」から見えて来るもの ー TPP=安保論 田代洋一</p> <p>TPP「合意」を検証し、調和・批准を止めるために 12・9 「検証TPPー全国フォーラム」 私のこれからの使命 ～ 未来の医療を支える研修医たちへ 第8回厚生連病院研修医全国大会を開催して 高野靖悟</p>	<p>2016年 1月 B5版 112頁 文化連情報 編集部 03-3370 -2529 *注</p>

農村医学は世直し運動 私の歩んできた道 (10)	小山和作
農村の健康実態調査から医療改革の烽火が 地域と歩む協同病院	
伊勢原協同病院第31回文化祭	寺西卓史
開院80周年記念 第12回渥美病院祭に行ってきました！	関根健太郎
病院建築と環境 (6)	
病院と環境建築	横山計三
海外の医療メデイエーション (4)	
フランスの無過失保障制度とメデイエーション	和田仁孝
福島原発事故被災と健康の将来 (5)	
ヒューマンファクターによる事故防止策の確立は必須	安藤 満
地域産業との連携による再生可能エネルギーの新展開 (7)	
東日本大震災からの復興に向けた土湯温泉における 小水力発電の取り組み	大平佳男
第1回 放射線科医療機器ライフサイクルコスト会議における事例報告の紹介	加賀谷晃
倉敷市「わが街健康プロジェクト」(最終回)	
プロジェクトの可能性と課題	小磯 明
大都市で「安心して家で最期を迎える」ための在宅医療	安井 祐
グーテンターク、ドイツ (16)	
ドイツのケーキー クーヘンとトルテ	鶴殿博喜
デンマーク&世界の地域居住 (80)	
オランダの革新① 高齢者住宅は社会住宅	松岡洋子
線路は続く (94)	
湖西線 古代へのいざない	西出健史
最近みた映画 黄金のアデーレ 名画の帰還	菅原育子

<p>▶日本協同組合学会 第34回春季研究大会</p> <hr/> <p>協同組合研究 2015. 12 第35巻 第1号</p> <p>日本協同組合学会</p>	<p>特集1 日本協同組合学会第34回春季研究大会 経済のグローバル化と地域・社会・協同の新しい形 —メゾ領域における協同の主体形成に向けて</p> <p>座長解題 小山良太 / 北川太一</p> <p>[セッション1] グローバル化時代における食、農、地域産業</p> <p>第1報告 食と農におけるグローバル化の進展と家族農業 関根佳恵</p> <p>第2報告 食と農で地域をつなぐ協同のあり方 —真の地産地消と6次産業化を問う— 則藤隆志</p> <p>コメント 石塚哉史</p> <p>[セッション2] 食農資源に根ざした暮らしと地域循環型経済の構築 —地域の事例から</p> <p>第1報告 中山間地域における農業・生活の維持と協同のあり方 —下郷農協のいま— 山浦陽一</p> <p>第2報告 農産物直売所を核とした地域循環型経済の構築条件に対する一考察 東大阪市「ファームマイレージ2運動」を事例に 青木美紗</p> <p>コメント 宮部和幸</p> <p>特集2 新協同組合理論研究会 コミュニティに埋め込まれたエネルギー生協の可能性 —栄ガス消費生活協同組合と安房電気利用組合の実践から— 三浦一浩</p> <p>書評 神田健策・編著『新自由主義下の地域・農業・農協』（白石正彦）</p>	<p>2015年 12月 B5版 86頁 定価2160円</p>
---	--	--

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

第50回 「建国記念の日」不承認・2.11愛知県民のつどい

戦後70年と安保法制反対運動

日時：2016年2月11日(木) 午後1時開場、1時30分開会 資料代：500円

場所：ウイルあいち(愛知県女性総合センター)3階大会議室

ウイルあいちは名古屋市市政資料館南側隣り ●地下鉄「市役所」駅 2番出口より東へ徒歩約10分
●市バス幹名駅1「市政資料館南」下車 北へ徒歩約5分

講師 白井 聡 氏

「永続敗戦レジームの終焉へ」
(京都精華大学人文学部専任講師)
(著書)『永続敗戦論』(太田出版)、
『未完のレーニン』(講談社)ほか

講師 愛敬浩二 氏

「安倍政権から『戦後日本』を取り戻す」
(名古屋大学大学院法務学研究科教授)
(著書)『改憲問題』(ちくま新書)、『近代
立憲主義思想』(法律文化社)ほか

安保法案反対運動の最前線に立って奮闘された中堅・若手研究者2人の方に、この運動に参加された思いと、その中で考えたことを、戦後70年と結びつけて議論をしてもらうこととしました。

●主催：思想・信教・教育の自由を守る愛知県民のつどい実行委員会

事務局 名古屋大学文学部日本史学研究室気付 名古屋歴史科学研究会2.11事務局

HP：<http://homepage3.nifty.com/rekishikagaku-aichi/index.htm>

書籍案内



さらばアホノミクス 危機の真相

著者：浜 矩子 発売日 2015年11月17日

出版社：毎日新聞出版 判型：新書サイズ 192ページ

定価(本体 1100円 + 税)

内容

もはや経済政策にあらず! 「強い国」の危険な正体! 今、決別の時。アベノミクス、TPP、中国経済の減速、ギリシャ危機……。安倍首相の経済政策「アベノミクス」を「アホノミクス」と批判し続ける「ブレない経済学者」浜矩子・同志社大学大学院教授が、混迷深まる「アベノミクス」と世界経済を一刀両断!! 毎日新聞人気連載「危機の真相」の書籍化!!

目次

はじめに

第一章 「アベノミクス」の終焉

第二章 日本の危機

第三章 世界の危機

毎日新聞出版 ホームページより

2016年1月25日発行(毎月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

研究センター 2月の活動予定

- 2日(火)国際協同組合デー記念行事相談会(愛知)
- 3日(水)くらしと生産をつなぐものづくり準備会/事務局会議
- 5日(金)研究フォーラム環境世話人会
- 8日(月)NEWS編集委員会
- 11日(木)三重地域懇談会世話人会
- 12日(金)研究フォーラム地域福祉を支える市民協同
- 13日(土)愛知における協同組合連携を推進するセミナー
- 14日(日)共同購入事業マイスターコース第7回
- 17日(水)尾張地域懇談会世話人会
- 18日(木)研究フォーラム職員の仕事を考える/常任理事会
- 22日(月)岐阜地域懇談会
- 26日(金)研究フォーラム食と農 学習会
- 27日(土)東海交流フォーラム実行委員会/理事会